

お茶の水女大生活科学 黒田淑子

目的 親子関係の諸課題を生活縮図的に探究する方法として、“日常生活にひらかれた”心理劇の活用の可能性を探り、その方法論的な特性をいかした課題の考究を行う。今回は、親子をめぐる日常生活の複雑な現象をどう認識するか、具体的な現象の根底にある本質的なものをどう理解するか、心理劇での気付きを日常にどうつなげてゆくかなどに着目し、基本的な関係構造を表演する心理劇の特性・効果・留意点について探究する。

方法 1988～1994年度お茶大乳幼児集団研究会、児童集団研究会の親グループにおいて行われた心理劇の中から、A. 親子関係の問題状況を表演する心理劇、B. 支えあう親子（父母子関係）を表演する心理劇、C. 家族をめぐるテーマを表演する心理劇を取り上げ、監督の状況演出、関係構造の類型、個の役割行為・体験の変化を明らかにする。

結果および考察 Aの心理劇は問題提起の過程で導入する。言葉による説明と、手あるいは身体全体での問題の核心となる関係の表演により、問題状況が浮き彫りになり、その後の集団討論が活発になる。夫婦関係の危機が親子関係の危機へ；関係の発展をはばむ役割行為など。Bの心理劇は、具体的な問題解決の心理劇と組み合わせて行う。心理劇での気付きを、さらに行為化していくことにより、支えあう関係づくりのきっかけや補助自我的役割行為についての洞察が深まる。Cの心理劇は、一連の活動のまとめの段階で導入する。「生命を育む」「リラックス」「自立と共存」「絆」など参加者の発見を言葉にして、それをグループで表演することにより、親子・家族の存続意義やそのありかたについて総合的な考究が行われる。基本を表演する心理劇は他の活動につなげていくと効果的に活用できる。